



パソコンなどに内蔵される HDD の軸受に採用されています。耐久性の向上と回転の騒音減少、防塵シール機能として使われていたことから、「防塵ができるなら防水もできるかもしれない」という発想が生まれたそうです。海で使用するリールは、“防水”“防塵”が永遠のテーマということもあり、無謀と思われたメーカの開発陣の挑戦が始まったそうです。

ロッド（釣り竿）についても天然素材である竹などを利用していた時代から、グラスファイバー、カーボンファイバーへと時代は移り変わっていきました。強度や弾性率を上げるために、カーボンファイバーの特性を活かしたロッド構造の開発がされてきました。ブレのない投げやすいロッドを開発するために、特性である正確性、投げやすさ、遠くへ飛ばすための遠投力、長く使用しても疲れを感じない低疲労、感度と質を探求しています。

ロッドに取り付けるガイドも進化してきました。金属リングから摩耗と滑りをよくするセラミック素材（SiC）を使用したガイドが、使用されるようになりました。ガイドリングの特性には、硬さ、滑り、軽さ、強さ、そして摩擦熱を逃がす放熱性というものがあります。また、この素材の進化は、ライン（釣り糸）の進化によるものかと思えます。一昔前は、ナイロンが主流でした。しかし、最近では、魚の当たりが直接伝わるように、より遠くへ飛ばすために風の抵抗を小さくして、ナイロンよりも細くて丈夫な糸を使用したいというニーズがありました。そこで、細いポリエチレン繊維を何本も編みこんで一本にしたライン（PEライン）が開発されました。金属、樹脂ガイドリングでは、PEラインにより摩耗が進行し溝ができラインを傷つけやすくなるために、耐摩耗性を考慮したセラミック素材が使用されたという経緯があるようです。

私は、小学生の頃に「ヘラブナ」に熱中し、兄

とクジャクの羽やバルサ材で「ウキ」作りをしていました。中学生になると、溪流のニジマス釣りに興味をもち、金物でスプーンやスピナー、バルサ材で魚の形に模したルアーを作って、お風呂場で動作確認していたことを思い出します。あの当時の釣り道具は、私にとっては高価でしたので、家で作るというのが楽しみだったようです。

現在は、老眼が進み細かい作業は苦勞しますが、海釣りの仕掛けは自作にしています。最近は、ステンレスのバネ材と半田ごてを購入し天秤びんづくりに凝っています。作るより市販品を買った方が安価ですが、こだわりの一つとして、自作品で魚を釣りたいという釣り師としての欲望があります。

釣りに行く前日は、魚の種類や大きさにより、使用する針の大きさやハリスの太さ、針の本数、または、海の状況により仕掛けを変えて準備しています。自作の天秤では、小さな魚の当たりでも敏感に感じ取ることができ、魚に違和感を与えないようなバネ構造で細めに作るように工夫しています。早朝の釣行に備え、魚と仕掛けとのイメージトレーニングをしながら寝付きます。

実釣のときは、周囲の環境の変化を観察しながら、仕掛けが環境になじんで、魚が何のためらいもなく、エサが食べられるように魚のいるポイントへ投入します。投入された仕掛けをゆっくり動かし、止めたりしながら当たりを待つのです。しばらくすると、心地よい魚の当たり「プルルン？」という魚振が伝わってきます。この当たりで魚の種類がわかります。ゆっくりとリールを巻いて、魚を誘うと再び「プルルン」と糸を伝わってロッドに振動が伝わってきます。この感触が忘れられず、釣りの楽しさを増していきます。

自作の仕掛けで何が楽しいかということ、自分で針の大きさやハリス間の間隔などが調整できることではないでしょうか？自作の仕掛けで魚からの当たりがあったときの喜びには、大変胸が弾みま



写真1 いしもちを釣って満願の笑顔

す。このドキドキ感を抑え、釣り上げたときは喜びとともに何とも言えない優越感に浸ります。魚が釣れても、喜んでばかりはられません。当たりがあったときの感触、距離、エサの状態、針の掛り具合、釣れた針の位置などを確認し、次の投

入の参考データとします。当たりがないときでも、当たりがあっても魚が釣れないときでも同じような確認をします。

釣れたときは、同一場所に仕掛けを投入して同じように当たりを待ち、釣れない場合はエサの交換や投入距離を変えたりして、魚のいる場所を探るのです。そして、今までのデータを調査・分析し、次の投入ポイントやエサの付け方、仕掛けの回収速度を考え、次の手を打っていくのです。これは、まさしくPDCAサイクルに当てはまりますね。

今回は、釣りというテーマでモノづくりとの関係を考えました。新しいリールの発明やカーボンロッドの登場、PEラインのように新素材の採用により、さまざまな道具（タックル）も進化してきました。

次世代へ繋げるためにも、世の中の流れを見て、ニーズとシーズのバランスを考えながら方針を立て、実行し、その結果を分析・評価して次の新しい課題に取り組んでいくことにより、新しい技術、新しい製品が生まれてくるものと信じて、技術の発展を期待しています。



監査役

若槻 光昭

TEL. 045-791-3550

FAX. 045-791-3555